

美しい夏キリシマ

2006(平成18)年8月20日鑑賞(テアトル梅田)

★★★★



監督＝黒木和雄／出演＝柄本佑／原田芳雄／左時枝／小田エリカ／中島ひろ子／寺島進／石田えり／香川照之／牧瀬里穂／眞島秀和 (パンドラ配給／2002年日本映画／118分)

……敗戦を間近に控えた霧島を臨む宮崎の小さな農村。そこには、黒木監督の分身ともいえる、親友を見殺しにしてしまったという心のキズを抱えた中学校3年生の少年が、祖父の元で暮っていた。敗戦間近といえども、村の人々や軍人たちそして使用人たちにはそれぞれの生活の営みがあった。しかし、8・15の玉音放送によって、少年は立ち直れないまま終戦の日を迎え、その日を境に大人たちも大きなキズを……。以降、この少年はどのような人生を歩むのか、そして日本国はどのような歩み始めるのか……？ 黒木監督の自分自身への問いかけが、すべての観客の胸に響いてくるはず……。

追悼・黒木和雄監督特集その1

黒木和雄の最新作『紙屋悦子の青春』(06年)が9月2日から公開されるが、4月12日に死亡した黒木監督の追悼特集としてテアトル梅田が企画したのが、①『TOMORROW／明日』(88年)、②『美しい夏キリシマ』(02年)、③『父と暮せば』(04年)の戦争レクイエム3部作の上映。③は既に観ていたが、①、②はどうしても観たかった作品であるため、まずは『美しい夏キリシマ』を日曜日の朝1番に。

時代は1945年8月、舞台は？

黒木監督の戦争レクイエム3部作の時代設定はすべて1945年8月だが、その第2作の舞台は九州宮崎の霧島を臨むある村。第3作の『父と暮せば』や遺作『紙屋悦子の青春』(06年)は、登場人物が極端に少なく、まるで舞台のような構成

をしていたが、この第2作はそうではなく登場人物はかなり多く、さまざまな立場の人物像を通して、あの時代の矛盾と悲しみ、そしてあの戦争の無意味さを描くもの……。

主人公の康夫くんは……？

『父と暮せば』は宮沢りえ、『紙屋悦子の青春』は原田知世が主人公を演じていたが、第2作の主人公は意外にも(?)日高康夫少年(柄本佑)。もっともこれは意外なことでも何でもなく、そう思ったのは私が黒木作品を新旧逆に観ていたことと、私の黒木監督についての学習不足によるもの。

つまり、この映画は、宮崎県に故郷を持つ黒木監督自身が、祖父の家に送り返され、中学生の頃には学徒動員となり、空襲の中、自分の隣にいた友人が頭を撃たれて死亡するのを目の前にしながら助けることもできず逃げ出してしまったという体験を基にしたもの。したがって、康夫少年はいわば黒木監督の分身というわけだ。

そしてこの第2作の完成を受けて、黒木監督はあの戦争をどうしても描き続けなければならないと考え、それが戦争レクイエム3部作の完成と『紙屋悦子の青春』につながったわけだ。

祖父日高重徳の人物像は？

康夫が住んでいるのは、祖父日高重徳(原田芳雄)の大きな屋敷。彼は日本陸軍の中でかなりの地位まで昇りながら、意見が衝突して退役し故郷に戻ってきたらしい。そのことは、日高家の使用人であるなつ(小田エリカ)とはる(中島ひろ子)との間のおしゃべりでわかる。

また、重徳の妻しげ(左時枝)は、いかにもあの時代の地主の妻らしく、統率力のあるしっかりした女性。

多くの登場人物たちは……？

日高家によく出入りしているのが芹沢大尉(甲本雅裕)だが、それは日高家の小屋を軍隊の食料品置場として使わせてもらっている関係以上に、さまざまな親

密なつながりがある様子。

なつの母親は小作人のイネ（石田えり）だが、その夫は既に兵隊として死亡し、なつの弟の稔（倉貫匡弘）と一緒に生活をしている。しかしこの家には豊島一等兵（香川照之）が忍んできているらしく、その後それが大問題に……。

そして日高家の三女が美也子（牧瀬里穂）で、彼女は映画後半にやっと登場するが、特攻隊員となる浅井少尉（眞島秀和）との関係が悲しく描かれる。

他方、満州に住むという康夫の両親はスクリーン上に全く登場しない。そして康夫の従姉にあたるのが世津子（平岩紙）で、あんな時代にあっても思春期特有のエキセントリックな動きを見せるので面白い。そして康夫の死んだ親友の妹が波（山口このみ）。

康夫少年の心の痛みは……？

黒木監督の分身ともいえる中学3年生の康夫少年は親友を助けることができず、逃げ出してしまったというショックから肺浸潤という病気になり、悶々とした日々を送っていた。しかしそんな康夫の姿勢は厳格な祖父の目には自堕落に映るらしく、コトあるごとに小言の数々……。

今日康夫は親友の妹、波が沖縄から宮崎の親戚の家に引き取られていることを耳にし、1人彼女に会いに行くことに。誰にも心を開かず、いつも屋根の上から波が見ているのは、霧島ではなくその向こうにある故郷沖縄の姿。宮崎の人々にとっては霧島が見慣れた美しい風景だが、波にとっては霧島は沖縄を見えなくしている元凶だから大嫌いらしい……？

「兄さんを助けられなかったことを許してくれ」「できることは何でもするから」と訴える康夫に対して波が言い放った言葉は、「それでは兄の仇を取ってくれ」という過激なもの。しかし、それを真に受けた康夫は何を思ったか、突然裏山に壕を掘ってそこに入り、それまでバカにしていた竹やりの訓練を1人やり始めたから、家族はみんなビックリ……。戦争のカゲが、そして親友の死がこれほどまでに少年の心を痛めつけていることを痛感。そして敗戦の日を迎え、村に入ってきたアメリカ軍に対して、康夫は1人叫び声をあげながら竹やりで突進していったが……？

大人たちが背負い込んだキズは……？

康夫が住む村に駐屯してきたのは、満州から移動してきたある部隊。彼らはアメリカ軍の本土上陸に備えて肉弾攻撃を仕掛けていくための訓練を続けていたが、その中には軍の食料品を盗み、民間人の家に忍んでいく豊島一等兵のようなはぐれ者もいた……？ しかし、特攻隊員として死んでいった浅井少尉はともかく、天皇陛下の玉音放送を聞いた後は、康夫のみならず大人たちの人生観もガラリと変わり、それぞれあの戦争によって背負い込んだキズを一生抱えて生きていくことを余儀なくされることになった。

そんな中、祖父日高重徳は急激に老け込んでしまった。また、死んだとばかり思っていた夫が生きていると知ったイネは自殺を図ったが、それを息子の稔に止められ、今日は家を焼き払い、どこへともなく村を去って行った。そして、スクリーン上には描かれていないものの、秀行とはる夫婦や三女の美也子、従姉の世津子のこれからの生き方は……？ さらに、突然心の拠り所を失った、それまで徹底抗戦、玉砕を叫んでいた軍人たちのこれからの人生は……？

『キネマ旬報』特集と「私の履歴書」

『キネマ旬報』8月下旬号は追悼特集として、「黒木和雄監督と『紙屋悦子の青春』」を掲載したが、ここでの佐藤忠男氏の「黒木和雄論 挫折にこだわり続けた映画作家」は必読！ これを読むことによって、なるほど黒木監督とはこういう人物だったのかということがよくわかった。

黒木監督が自らの体験を基にこの作品によって、あの戦争とその終結そして戦争が日本人たちに残したキズを赤裸々に描くことができたのは、戦後57年を経た2002年になってからのこと。さて、そんな黒木監督の思いを私たちはどのように受け止め、どのように次の世代に引き継いでいけばいいのだろうか……？

他方、私は日経新聞の「私の履歴書」のファンだが、黒木監督もあと10年長生きすることができれば、彼の念願の企画だった「山中貞雄」や「藤田嗣治」を撮り、十分功成名を遂げたところで「私の履歴書」の執筆をすることになっていたのではないかと、思うと実に残念……。 2006(平成18)年8月23日記